

〔 調査概報 〕

千葉市加曽利町 兼坂古墳発掘調査概報

後 藤 和 民

I 発掘の動機

昭和41年4月、千葉市都町980番地在住の須藤覚氏は、加曽利町925番地で同家が経営する鶏舎を拡張増築するため、隣接する畑地を小型ブルドーザーで削平整地をおこなった。その最中に、組合式箱形石棺の蓋石が露出し、そのうちの1枚が割れて棺内に落ちこみ、中をのぞくと、棺内に数体の人骨が比較的良好に残っていたという。須藤氏は早刻工事を中止し、その状況を県の社会教育課に通報し、その文化財係から市の社会教育課に連絡があった。そして、「近く加曽利貝塚博物館が開館することでもあり、そのすぐ近くの千葉市内の遺跡でもあることから、将来の展示のために、埋葬人骨だけでも取り上げて置いたらどうか」との指示があった。

当時、加曽利貝塚博物館の開館準備に専念していた筆者は、この通報を受けて直ちに現地に急行してみた。すでに石棺の上を覆っていた表土や封土は削り取られ、周辺も石棺上蓋の面で水平にならされていた。墳丘や覆土は失なわれているが、周辺部の地形から推察して、周溝が残っている可能性があり、主体部もほとんど原形を保っている。この程度なら、まだ墓壙や石組の構造などの埋葬形態や、周溝の確認による墳形やその規模の把握ができそうである。ただ人骨だけを取り上げるために、この可能性を放棄するのは極めて勿体ないと思われた。

地主の須藤氏と相談したところ、養鶏業の経営のためには、ぜひとも鶏舎の拡張が必要である。あとの祟りが恐いので、ぜひ市の方で徹底的に発掘してほしい。それに必要なら削平工事を1～2ヵ月延期しても構わないという。そこで、市の社会教育課で緊急調査費をねん出し、急遽、発掘の態勢を整えたのである。

II 調査態勢および調査期間

1. 調査担当者

調査主体 千葉市教育委員会
調査主任 加曽利貝塚博物館準備室学芸員 後藤和民
調査員 市川市教育委員会・熊野正也
明治大学学生・平田美智子・小池公子・栗野克己・松尾宜方・天野努・小穴 臣・安達 新・山口

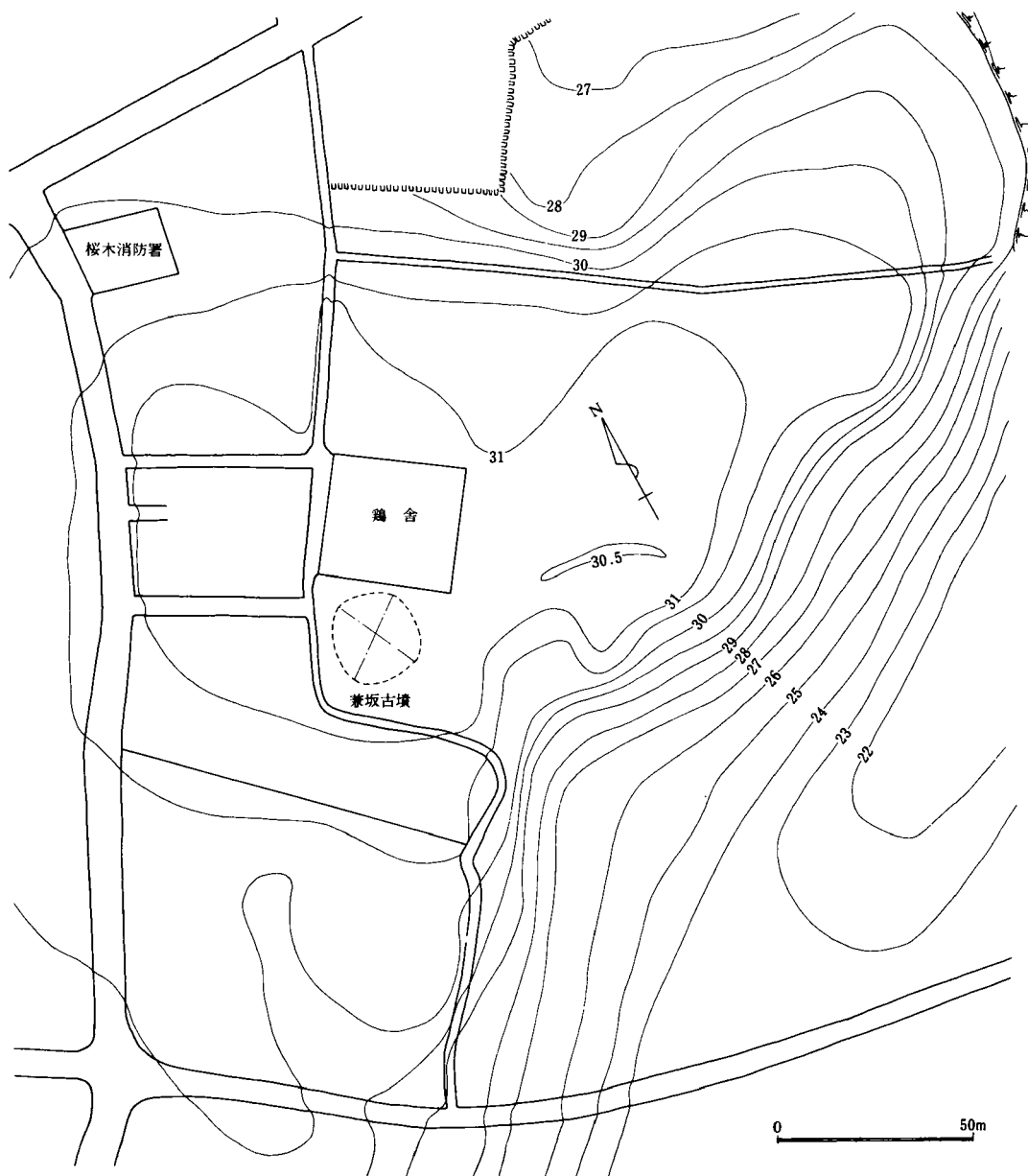
2. 調査期間

開始 昭和41年5月 1日
終了 昭和41年6月15日
(1) 地形測量調査 5月1日～5月3日
(2) 周溝確認調査 5月1日～5月15日
(3) 主体部調査 5月16日～6月15日

III 調査の目的

従来、千葉県下においては、堅穴式墓壙埋納の組合式箱形石棺を主体部とする古墳には、なぜか墳丘を伴わないというのが一般的傾向である。現に、千葉市内より発見されている組合式箱形石棺は、地表面ではその存在さえ判別できないような平坦地から、造成工事中に発見される例が多い。たとえば、明治年間に開墾中に発見されたという加曽利町の新山古墳群中の1基、昭和2年に市原伝之助氏によって発掘されたという加曽利町辺田前古墳群中の1基、昭和33年、東京電力KKの社宅建設工事中に露出したという松ヶ丘町の古墳、その他大宮町の阿弥陀古墳などが挙げられる。

ところが、これらの古墳が、元来墳丘をもたぬものなのか、それとも墳丘部だけが削平されたものなのか、あるいはその形態・規模・構造および所属時期などについては、まだなんら把握されて



第1図 兼坂古墳の周辺地形図

いない。とくに千葉市内においては、これらの要件を把握しうるような発掘調査の実例は、この種の古墳に関してはまだ1例もないのである。これは千葉県内においても同じで、このままの状態では、今後においても、この種の古墳は常に造成工事などによる偶然の発見にまつよりほかなく、またそのときには、すでにその大半の要件を失っているのに、いつまでたってもその性格は把握できないという結果になりかねないのである。

とくに、千葉市内においては、前方後円墳や横穴が乏しく、少数の大型の円墳や方墳を除くと、その大半が小型の円墳群である。その中に、この組合式箱形石棺を伴う古墳が、いかなる位置を占め、いかなる意義をもっていたかを把握しなければならない。それには、当然ながらこの種の古墳の墳墓形態としての実態やその種別やその変遷の様相が捉えられていることが前提となる。たとえば、この種の古墳が、ほぼ古墳時代の後期に属す

るものであろうことは予測できたとしても、同じく後期に属する墳丘を伴う小円形の群集墳との関係を捉えることは、その実態が不明であるかぎり、いつまでも不可能なのである。

この古墳の地域研究における盲点を明らかにし、その解明の糸口を探るためにも、今回の調査は、ただ主体部のみの発掘に終ってはならない。この際、限られた予算と人員と期間内とはいえ、われわれはできうるかぎりの探索をおこなう義務があると自覚したのである。

Ⅳ 古墳の立地と周辺遺跡

この古墳は、千葉市加曽利町字兼坂と字寒風台の一部にかけて所在する。東京湾に注ぐ都川本谷から複雑に分岐する支谷の1つに、その河口から約3kmほど遡った田向部落から北上する加曽利支谷がある。その支谷の先端は、加曽利中学校の所在する1つの舌状台地を挟んで二又に分れるが、この古墳は、その西側の中学校裏手に反転している谷頭の最奥部に位置している。標高約31mのやや平坦な台地縁辺部に立地している。

地元の古老の話によると、この兼坂古墳の周辺には、かつて数基にのぼる円墳群が所在し、その中の最大の規模をもつものは「梵天塚」と呼ばれていたが、明治末年頃、畑地の開墾・整備のために削平され、すべて消滅してしまったという。ただ、この古墳の南西わずか150mの十字路の1隅に、直径20m前後の小円墳が残っている。俗に、「聖人塚」と呼ばれ、かつて明治年間に埴輪の破片が出土したと云い伝えられている。その真偽は別としても、この台地上一帯には、この兼坂古墳を含めて、一つの古墳群が展開していた可能性は十分に考えられる。(28頁参照)

なお、この兼坂古墳周辺の平坦部には、おもに縄文時代前期(黒浜～関山式)および後期(堀之内～加曽利B式)の土器片がかなり濃密に散在している。とくに、本古墳の北東に隣接する舌状台地(千葉市桜木消防署裏手)の全面においては、ごく少量ながら土師式土器(鬼高～国分式)の破片が散在している。したがって、この古墳や古墳群と関連した当時の集落が、この周辺に全くなかったとはいえない。むしろ、この古墳を築いた人びとの集落を確認するためには、今後、この周辺

部を広範囲にわたって精査する必要があるだろう。

Ⅴ 調査の概要

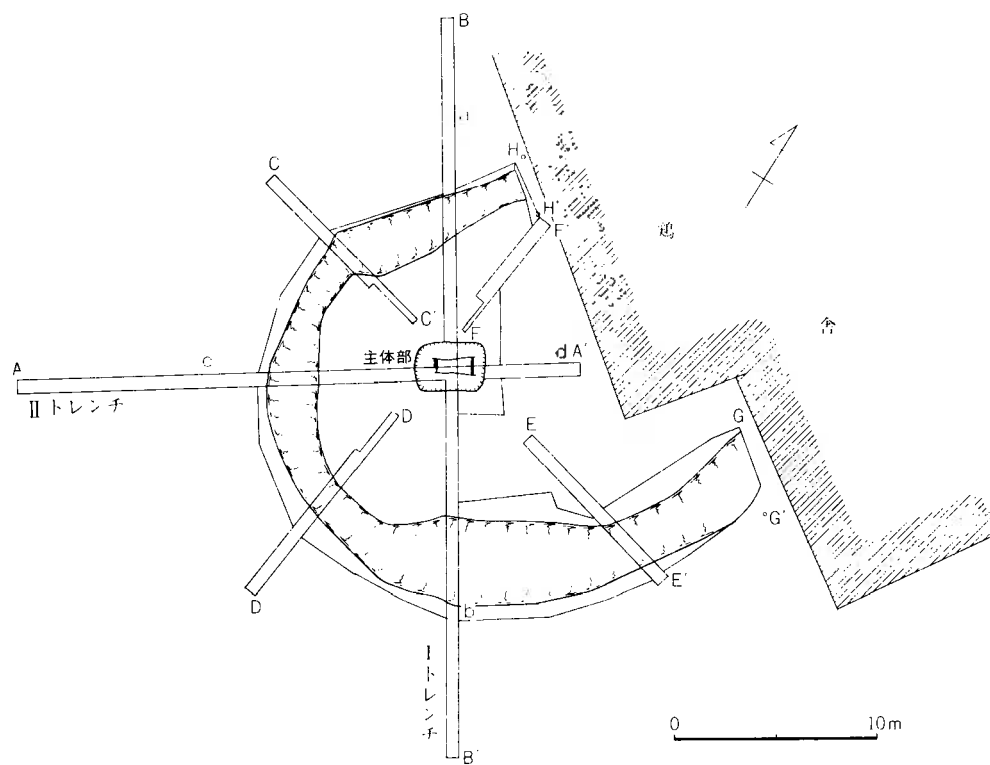
1. 地形測量調査

まず調査班を2班に分け、第1班は兼坂古墳の立地を正確に把握するため、周辺の地形測量をおこない、第2班は古墳の形態・規模を把握するため、周溝部の確認調査を担当した。

地形測量は、400分の1の縮尺で、台地部の平板測量をおこなった。とくに、この古墳の周辺部の地積は字名を「立木」といい、その名称から、中世城郭が所在していた可能性を暗示している。現に、南側の小支谷をへだてて、現在加曽利中学校の校舎が載っている舌状台地が、俗に「夕霧城」と呼ばれ、堀切り、土塁、物見台、腰曲輪などの遺構がある。しかも、その南端の腰曲輪に妙見社(貴船神社)が所在するので、それが千葉氏に関連した中世城郭であることは明らかである。伝承によれば、千葉常胤の長子・胤正は「加曽利冠者太郎」と称し、この周辺に居城を構えていたという。その外郭の関連遺構が、この古墳周辺に残存する可能性が多分にあるので、まずは、そのような後世における地形変更の痕跡を確かめることが肝腎なのである。

しかし、さいわいなことに、舌状台地の南側縁辺部において、畑と防風林との境界にある浅い堀切りと低い土塁状の盛土は、畑地耕作において木の根などの伸長を防ぐための「根切り」であり、その他の周辺部には、物見や腰曲輪などの遺構は全く発見されなかった。

この台地は、古墳の所在する地点をピークとして、北東の方向に向ってわずかに傾斜しているが、その先端部まで、地表面はほとんど平坦である。ただ気になるのは、その南側および北東端の側面は、かなり急峻な崖面をなしており、その先端部は、周辺の眺望がよくきく地点である。もともとは、さらに象鼻のように突出していて物見台状を呈していた可能性もある。しかし、この先端部は人家の造成のためにすでに削り取られ、その直下にある「じゅんさ池」も、最近つくられた人工の溜池であるという。もはや地形の想像復原さえ困難な状態なので、確実なことは判らない。



第2図 兼坂古墳のトレンチ設定図



第3図 兼坂古墳の全景

なお、この北東に隣接する平坦部には、この古墳と同種のもので潜在している可能性が考えられるので、地表面において微細な土砂の盛り上りや作物の色調の変ったソイルド・マークなどが認められないものと、細心の注意をはらったが、表面的観察だけでは、ついに発見することはできなかった。しかし、この全域に計画的なトレンチを縦横に設置して発掘調査をおこなえば、あるいは同種の古墳を発見することができるかも知れない。なぜならば、聖人塚と兼坂古墳の位置から、この南側支谷に面したこの北東先端部こそ、古墳築成のための占地として最適の場所だからである。

2. 周溝確認調査

まず、この種の組合式箱形石棺を伴う古墳にも、必ずやその墓域を画する周溝がめぐらされているに違いないという目算をたてた。ただ、それが円形を呈するものか方形をなすものかは全く不明である。その墳形の縄張り（区画）が把握されない以上、主体部の位置づけができないので、この周溝の確認こそ第1の要件となる。

そこで、主体部を中心にその主軸を基準にして、東西・南北および北東―南西、北西―南東（主軸）の方向に、巾1 m長さ25～35 mのトレンチを放射状に設定した。その結果、それぞれのトレンチ内において、巾3～6 m、深さ30～50 cmの舟底形を呈し、その中に黒色有機質土がレンズ状に堆積している部分が確認された。しかし、その溝状の落込みはかなり不整形で、その形態や巾や深さなどもまちまちで、しかもブルドーザーの削平により、すでにその立ち上りや掘り込みの旧地表面は不明になっている。これだけの把握によって、直ちに墳形を予測するのはいささか困難である。

各トレンチの断面を図に記録したのち、これらの溝の部分をつなぐ線上において、トレンチ相互間の現表土（ブルドーザーで削面された露出面）をさらにていねいに削り取り、その溝状遺構内堆積の黒色土層の上面を露呈してみた。その結果、その溝の北側の一部は、現在建っている鶏舎のためすでにコンクリート敷の下になっているが、これが古墳の主体部を囲繞する周溝であることは明白である。この周溝の確認によって、この古墳の縄張りは、周溝の外側で測って長軸約30 m、短軸約20 mのほぼ楕円形を呈し、主体部はその中心より

やや北西よりの位置に、主軸をほぼ北東方に向けて旧地表面から下に埋納されていたことがわかった。

なお、須藤氏の話によると、ブルドーザーで削平する以前の地形は、たしかに、この周溝が確認された範囲において30～50 cmほどの盛り上がりがあり、周辺部ではもっともレベルが高かった。だからこそ、その土砂を平坦にならすためにブルドーザーを頼んだという。さらに記憶をたどってみると、その盛り上がった部分は、かつてはごく低い塚状を呈しており、祖父の時代から耕作のたびに少しずつ周辺にならして、次第に平坦になるように努力してきたという。したがって、この古墳も、かつてはごく低いとはいえ、一応墳丘をもつた円墳であった可能性が十分に考えられるのである。

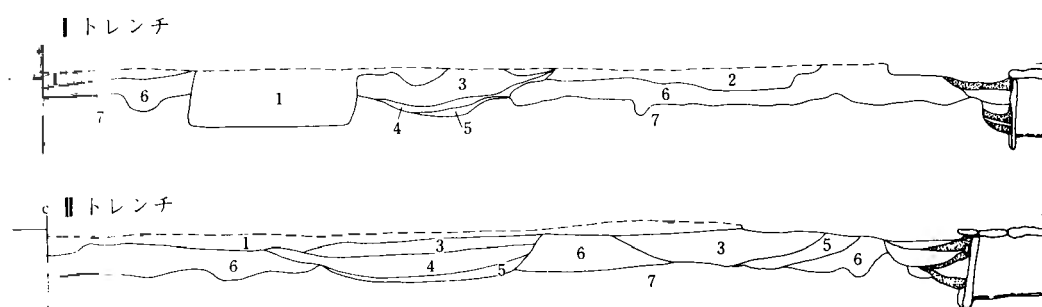
3. 主体部の調査

周溝の確認によって、古墳全体のプランの中における主体部の位置が把握できたので、いよいよ主体部を解剖して、その構造と埋葬形態の調査に取りかかった。まず、その平面的把握や断面的把握を正確に定着するための基準として、主体部を取り囲む4 m×6 mの「やりかた」を設置して、その測量基点とレベル標準点とした。

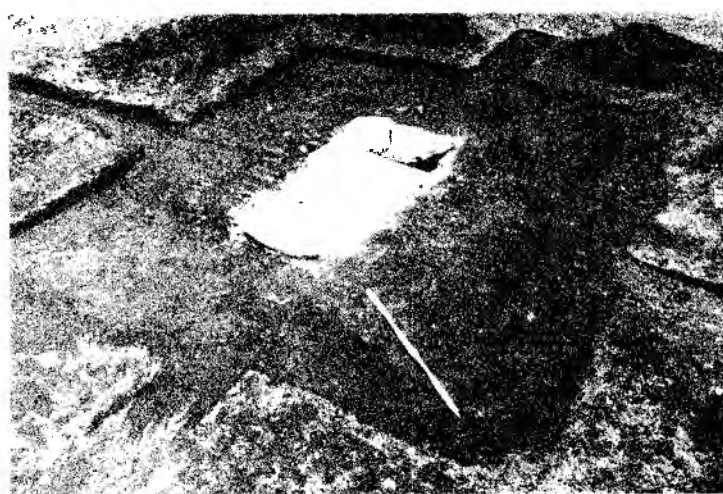
(1) 墓 壙

すでに当時の地表面は、ブルドーザーで削平されて、古墳周辺部においてはどこにも見出すことはできないので、現在の露出面より以下の残存部分の状態を把握するより仕方がない。そこで、石棺の主軸に合わせて設置した南西―北東および北西―南東の十字に直交する2本のトレンチによって、墓壙の掘り込みの状況を断面的に把握することからはじめた。

その観察によると、この墓壙は、石棺の形に合わせて、少なくとも3段にわたって階段状に掘り込まれている。旧地表面はいざ知らず、露呈面における第1の区画は約2.5×3.3 mの隅丸方形のプランで、深さ約30 cmほど掘り込まれている。次に約1.6×2.8 mの隅丸方形で深さ30～35 cmほど掘り込まれた第2の区画がある。そして最後に、巾約20 cm、深さ30～35 cmの細長い溝が、約1 m×2.8 mの方形に掘り廻らされ、その溝の中に石棺



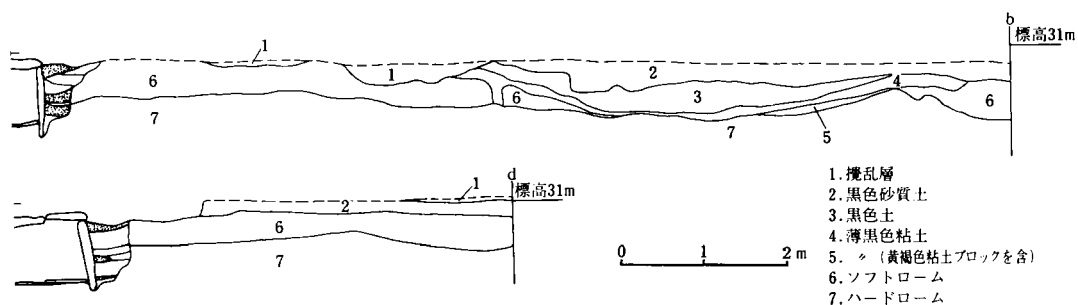
第4図 兼坂古墳のトレンチ断面図



第5図 兼坂古墳の主体部(1)



第6図 兼坂古墳の主体部(2)



の側石や木口石が埋め込まれていた。この3段の階段状墓壇は、石棺の石材を壇内に運び込み、組み合わせる作業がやりやすいように考察されたものと思われる。

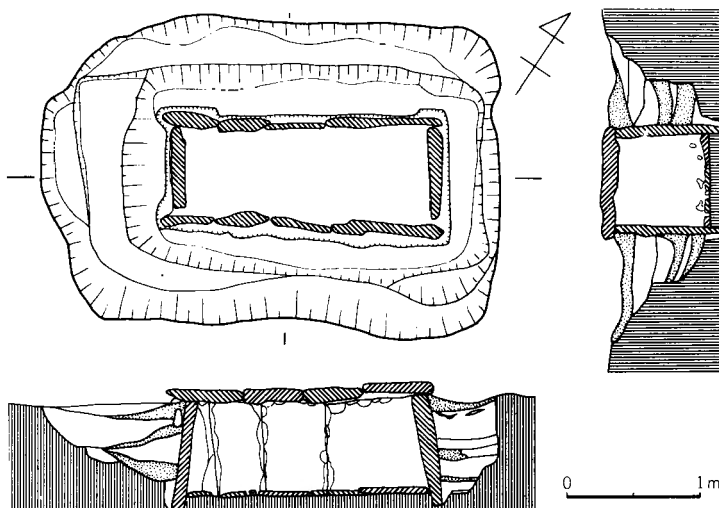
しかも、この断面的観察によって、石棺の設置の仕方や、その後の土砂の埋め戻す経過などを明確に捉えることができた。まず、墓壇のもっとも深い底面において、石棺の基底プランが巾の挟い溝切りによって決定される。その溝に側石や木口石が組み合わせられたのち、まず、その側石の合せ目に、外側から塊状の「めばり粘土」が厚さ5～10cmほど貼りつけられる。そして、下から粘土とロームとを交互に版築状に敷きつめられ、つきかためられる。それも、おのおの層が内側から外側に向ってやや傾斜するように、わざわざその厚さを変えている。これは、石棺内に雨水などが滲透しないように考察された作意的な処置であることは明らかである。

このような2本の直交するトレンチによる断面的様相を、図面や写真などの記録に止めてから、3段に区画された墓壇の掘り込みに合せて、また、平面に敷きつめられた版築に合せて、上から順に墓壇内の土を掘り上げた。その墓壇の全貌を確認すると同時に、石棺全体を露呈したわけである。当初、この墓壇内の土を除去すると、組合せた側石などが崩れるのではなかろうかと危ぶまれたが、その底面の先端がわずかに30～35cmほど埋

まっているにすぎないにもかかわらず、その石組はびくともしない。これは逆に、当時この石棺を構築する際に、このように底面から側石や木口を安全に固定してゆかなければ、石組の作業自体が進行しなかったことを物語っているのである。

(2) 石 棺

この組合式箱形石棺の石材については、埼玉大学地学教室の新井重三助教授に鑑定を依頼した。それによると、この石材はすべて黒雲母片岩であり、その原産地は筑波山系や長瀬地区のものではなく、むしろ福島県竹貫・御在所地区のものであろうとのことであった。発見したときは、すでに風化が進んでおり、雨水などに濡れると、表面が砂泥状に溶け、それが乾燥すると砂状になって剥落する傾向がみられた。

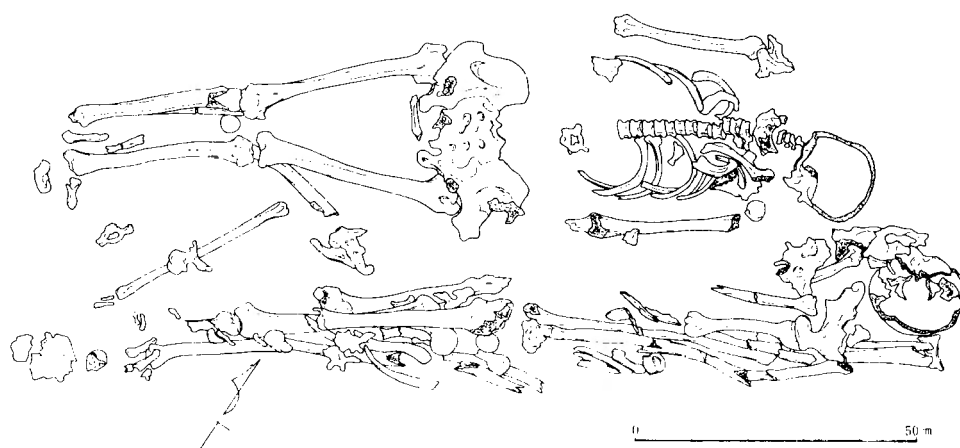


第7図 兼坂古墳の主体部実測図



◁ 第8図 兼坂古墳
の被葬人骨

▽ 第9図 兼坂古墳
の人骨実測図



第10図 兼坂古墳出土の副葬品（耳環・ガラス
小玉・刀子）

このような片岩を、厚さ10～20cmの板状に剥離したまま、その剥離面にはほとんど手を加えず、ただその縁辺だけが直線的にすり落され、全体が長方形に整えられている。この縁辺の「面取り」だけは、その接合のためか比較的丹念におこなわれていた。蓋石は4枚、側石は片面に4枚ずつで8枚、木口石は両端に大型の一枚石を配し、合計14枚を数える。底面の棺床には、不整形な小型の片岩が数10片用いられていた。

石棺の組合せ方は、まず、墓壙底面に、計画プランとして設定された1m×2.8mの長方形に掘り込まれた溝の中に、両端の台形を呈する1枚石

が埋め込まれ、その外側に、両側面の側石が4枚づつ、その上面が水平に揃うように、縦に埋め込まれる。しかも、木口石の台形に合わせて、上縁が底面より多少すぼまるように、やや内側に向けて傾斜させる。そして、それらの石の合せ目には内外から多量の粘土塊が詰められる。

このように、井桁状に組まれた木口石や側石によって囲まれた棺の内側の底部には、小型に割れた不整形の片岩が、モザイク状に組まれ、一面に敷きつめられて、それが棺床になっている。すなわち、側石や木口石の底部に比べると、その棺底のレベルはやや高くなっており、いわば「上げ底」状を呈する。これも雨水や地下水等の浸入を防ぐための考察と思われる。

最後に蓋石であるが、長方形を呈し、ほぼ大きさの揃った4枚の板石が、木口石や側石の上縁切口を覆うように、横に並べられていた。しかも、この蓋石の側面はことさらに丹念な面取りがされており、おのおのの合せ目には、ほとんど隙間がない。しかも、この合せ目にも粘土塊が上から貼りつけてあったか、あるいは蓋石全体を覆っていた可能性があり、ブルドーザーで削平した際、この蓋石上からおびただしい量の粘土が掻き取られたという。

(3) 被葬者

棺内には、合計3体の人骨が収納されており、その周辺に、金環1、刀子1、ガラス小玉1個が副葬されていた。後世の盗掘等による攪乱の跡は見出されず、ブルドーザーによる被害もほとんど認められなかった。

頭初、通報を受けて、蓋石1枚が外れた状態で中をのぞいたときは、石棺の内面は、全体が赤色を呈し、白骨化した被葬者の頭部や上腕部の表面までが赤く染っていた。これは石棺の組石全体の内面に、丹か朱が塗られており、それが剥落して下面に付着したものと推察された。ところが、一旦蓋をして、上面をシートで覆い、周辺の周溝や墓壇の確認調査を進めているうちに、棺内が乾燥するにつれて、その赤色はみるみる消えて、蓋石を外して、いざ主体部の調査にかかったときには、その痕跡さえ見られなくなっていた。それは層をなすほどの堆積物ではなく、棺内に浸入していた土の表面が濡れて、全体が赤味を帯びていた程度

で、丹や朱の粒子として取り上げることができなかった。おそらく、棺内覆土や人骨表面における一時的な酸化現象による発色と思われる。

被葬者は3体であるが、中央に仰臥伸展する1体だけが正常な埋葬状態で発見され、他の2体は東側側面に片寄せられ、四肢骨が混乱したり、頭位が逆転したりしていた。とくに、1体の年少者と思われる頭蓋骨などは、中央の被葬者の足首のあたりに位置し、その上半身の骨片が残存する位置からみて、かなり移動していることが明らかである。

これは、3体が同時に合葬されたものではなく各人骨が、3回にわたって順次追葬されたことを物語っている。すなわち、まず最初に、頭部が逆転し、もっとも四肢骨の位置が乱れている人骨が埋納され、その後、最初の人骨を東側に片寄せて第2の人骨が中央部に追葬された。そして最後にこれら2体の人骨がすでに白骨化した時点において、両者を東寄りに、しかも頭部と脚部の両方向に向けて上下にふり分けるようにして片寄せてから、その中央部に第3の人骨を追葬した。そのとき、第1の人骨の頭部が脚部の方に逆転したものである。

なお、これらの人骨の年齢および性別については、その遺存状態がその鑑定のための条件を満たすほどではなかったため、残念ながら不明である。ただ、最後の被葬者と思われる中央の人骨だけは、その頭蓋、四肢骨などの遺存が比較的よかったので、その骨骼や身長などから、成人の男性であろうという、新潟大学解剖学教室の小片保教授の教示を得ることができた。しかし、その正式な調査研究はまだおこなわれていない。

(4) 副葬品

棺内は、追葬時における前葬者の移動以外には、盗掘などによる攪乱は認められなかったが、周囲から侵入したと思われる土砂が、人骨の過半を薄く覆うほどに堆積していた。この土砂を取り除くに当たっては、とくに慎重を期すため、一々丹念に少量ずつフルイにかけながら精査したにもかかわらず、副葬品は意外に少なく、発見されたのは、わずかに次の3点にすぎなかった。

耳環 1ヶ

第3人骨の左肩部付近の棺底から出土。青銅製

金メッキで、太さ7×6.5mmの銅線を外縁径約23mmの環状に曲げ、その1方に1.6mmの間隙をもったもの。表面には緑青が覆い、金メッキも約 $\frac{1}{3}$ ほど剥落しているが、金属部分の保存状態は良い。

ガラス小玉 1ケ

第2人骨の脚部、あるいは第1人骨の頭骨近くから出土。直径4mm、やや扁平で、中央に直径1mmの小穴がけられたビーズ状のもの。緑色半透明の天然ガラスを加工したものである。

刀 子 1口

第2人骨の腰部付近から出土。全体の長さ15.0cm、刃部の長さ8.5cm、巾10.7cm、柄部の長さ6.5cm、巾1.4cm、鉄製鍛造で、酸化によって金属質部分はほとんど残っていないが、錆によってわずかに原形を保っているといった状態である。

以上のほかに、直刀や鉄鏃などの腐蝕した跡が残っていないものと、覆土の錆状酸化を注意してみたが、その片鱗さえも発見されなかった。

V 結 語

兼坂古墳は、長軸30m、短軸20mの楕円形を呈する巾約3m以上の周溝によって区画された内側に、堅穴式墓壇の中に箱形石棺を組合せた主体部をもつ古墳で、その棺内には、3体の被葬者が順次追葬された形で安置され、青銅製金メッキの金環1個、ガラス小玉1個、鉄製刀子1本が副葬されていた。

元来、この古墳には、ごく低いとはいえ多少の盛土があり、墳丘を伴っていたものと思われる。だが、その人骨の埋納状態からみて、少なくとも2回にわたって追葬された形跡があるので、この種の古墳は、もともと何回も追葬できるように考案されたものであり、そのためにあまり高い墳丘はもたなかった可能性が高い。

棺内には、3体も埋納されながら、その副葬品はきわめて貧乏たるものである。これは、被葬者1体に対して副葬品が平均1個という割合になり、そのおのおのの所属が明確ではないから、中には全く副葬品をもたなかった被葬者があった可能性さえある。しかも、元来2個以上の対をなさなければ装身具としての意味をもたない耳環やガラス小玉が各1個ずつしか副葬されていない。これは被葬者が生前に身につけていたものを、そのまま

死後の世界にまで持ち込むという思想から隔絶して、その片割れを1個ずつ副葬するというのは、すでに形式化した儀礼的な意味しかなくなっていたことを物語っている。

このような現象から総合して、この古墳が古墳時代の埋葬形態としては、きわめて末期的な現象であり、従来の伝統が形式的に受け継がれながらも、全く異質な意義をもちはじめたことを示している。とくに、同一棺内における3体もの追葬という形態から考えて、血縁を同じくする者の合葬としか考えられず、すでに階級分化がおこなわれた特定階層の家族墓的な性格が推定できる。

なお、この古墳の所属時期については、その副葬品の種類や、それぞれの形態や規模だけによっては、にわかに決定することはできない。とくに呪術的な装身具が多く、武器・武具がないということから、比較的古い時期を想定することは、この場合誤りである。古墳の生成・発展・消滅の歴史的過程からみても、この種の古墳が末期的な形態であり、後期古墳に属することは明らかであろう。むしろ、古墳時代後期における墳墓形態の多様化、地域的変則性として捉え、当時の地域豪族における身分・階級の分化現象と対応して、その性格づけをすることこそ、われわれに与えられた重要な課題であろう。

しかし、この問題については、この種の古墳の本格的学術調査の類例が必要であり、また、その周辺に存在する小円墳群の発掘調査によって、両者の関連性を把握しなければならない。千葉市を中心とする周辺地域においては、後期の古墳や古墳群が本格的に発掘調査をされた例が極めて乏しい。いまだ個々の古墳の存在意義や価値が把握されていないのに、すでに開発造成によって次々と古墳が消滅しつつある。いまこそ古墳に関する地方史的な調査研究が必要であり、そのためには、その可能性を確保すべき古墳自体の保存処置を講ずることの方が、文化財関係者の急務ではなかろうか。

(千葉市加曽利貝塚博物館・学芸員)